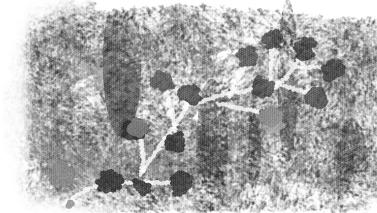


雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

秋 風

小 林 貴 子



暑き夜や海を打つたる蠍の尾
行く夏や世界最深深海魚

泥鰌鍋泥鰌がこちら向いてゐる

ドードー鳥絶滅の日や重信忌
神の抱く人間不信熱帶夜

根を絡め合ひて萍同士耐へ

何映す古代の鏡秋風裡

葛咲くや悚へ性なき山の雨
恋はうたかた月は歪んでレモン形

真つ白なチエロのケースや涼新た

痛 点

佐 藤 映 二

につぼんに痛点あまた茶立虫

魂迎桴陸前高田
山田湾に血豆の潰るるとも

大花火入江に復し牡蠣筏

ベルリン夜長壁たどる舗石蜿蜒と

実ざくろやテロ口實に増やす武器

セザンヌの根気に呆れ夜の桃

四季と折り合つ

佐藤 映二

去る九月二十三日、「俳都」松山で、子規・漱石・極堂の

生誕一五〇年記念全国俳句大会が開かれた。主宰が記念講演の講師に招かれた機会に合わせ、前日に現地に入った。

最初に訪ねたのは四国霊場五十一番札所の石手寺。小雨のなか、六人の仲間と一緒に深閑たる境内に佇んだ。「見上ぐれば塔の高さよ秋の空」(子規)は、従軍記者として帰国の船内で喀血し重態となるも回復、すぐに東京に帰らず松山の漱石の下宿・愚陀仏庵に身を寄せていた折の吟行句。

次に訪ねた一草庵は、山頭火の終の住処となつたところ。萩の花が真っ盛りで苑内の徑を塞ぐほどだつた。「おちつて死ねさうな草枯るる」(山頭火)の自筆句碑も。不意に蟋蟀が私の頭を掠めて着地し、いい句材となつてくれた。翌日は、一遍上人の誕生した寶嚴寺を訪ねたその足で、立子規記念博物館へ。四階のホールには三百数十人の俳句愛好者がぎつしり。募集句特選披講・表彰式・選者講評を午前に終え、主宰は午後一時過ぎから「子規の直・漱石の拙」の演題のもと、肝胆相照らす二人を浮き彫りにされた。

市